向陽介護便り

平成19年7月　第16号
発行人:㈲向陽介護システムズ
新宿区東五軒町1－12　青木ビル
TEL　03-3267-2015

ひかりのなかで

最近、フリーペーパーの中に　ある女優さんがこんなエッセーを綴っているのを見つけました。

リビングに初夏のひかりが射し込んでいる。そのひかりのなかで、細く白い髪を輝かせながら義母が寝息を立て横たわっている。　たぶん眠っている時が義母にとっては至福の時間。今朝はどんな夢をみているのだろう。

…（略）…　義母は認知症だった。お茶やお花の先生として沢山の生徒をかかえ頭の先から足の先まで隙のない着物姿の義母はすでに失われていた。

「まだ洗わなくて大丈夫。　自分でできるから大丈夫よ」と、着たきりの服で過ごそうとする義母を目の当たりにして当初夫は愕然としていた。同じ話を繰り返したり、失くし物（本当は失くしていない）を探したりすることよりも、汚れた服を判断できなくなったことや、食事の時のちょっとしたお行儀の悪さ・・・それは私が見ればほほえましく見える程度のことなのに・・・が、夫には悲しく思えるようだ。　「昔は絶対あんなことをする人じゃなかったんだ・・・・」

……（中略）……

西に日が傾く頃、義母はお茶を飲みながらいつもポツリと告白する。　「私ね、何にも覚えていられないの。おかしくなっちゃったのね・・・」　いつも不安なのだろう。それを他の人に悟られないように気を張っている毎日なのだ。

私は小柄な義母をギュっと抱きしめたくなる。大丈夫。お義母さんはいつも素敵。色んなことを覚えていたり、目標を達成したりすることは若い人の仕事。それよりも一瞬一瞬を丁寧に感謝の気持ちを持って生きていく姿がどんなに素晴らしいことか！

「今ね、ヒロブミが運動会で一番で走っている夢を見ていたのよ。　あの子とっても足が速かったの。それでね、近所の人が皆で・・・」

ひかりのなかで目覚めたことが懐かしそうに私に話をつづける。夢のなかで過去を反芻しそれが唯一生きる力になっているのだろう。人は誰でも生まれて死んでいく。　その間にせっせと家族を作り思い出を作ることは、結局自分を支えるためなのかもしれない。

（KEIO　あいぼりー　vol.44　より）

痴呆（認知症）老人を題材にした小説「恍惚の人」が出版されたのが1972年。 日本が高齢化社会（65歳以上の比率７％超）となったのが1970年でした。それ以降　日本社会は急速に高齢化が進み　併せ　認知症の高齢者も増加しています。

認知症の対応で大切なのは、認知症の人を現実の世界に対応させるのではなく、私たちがその人の持っている世界を理解して、その世界に合わせた対応をするということです。

認知症の人にとって穏やかな気持ちで生活することが、問題行動をおさえることになるのです。